

第2章 大船渡観光の現状と課題

1. 現状

(1) 岩手県観光の現況

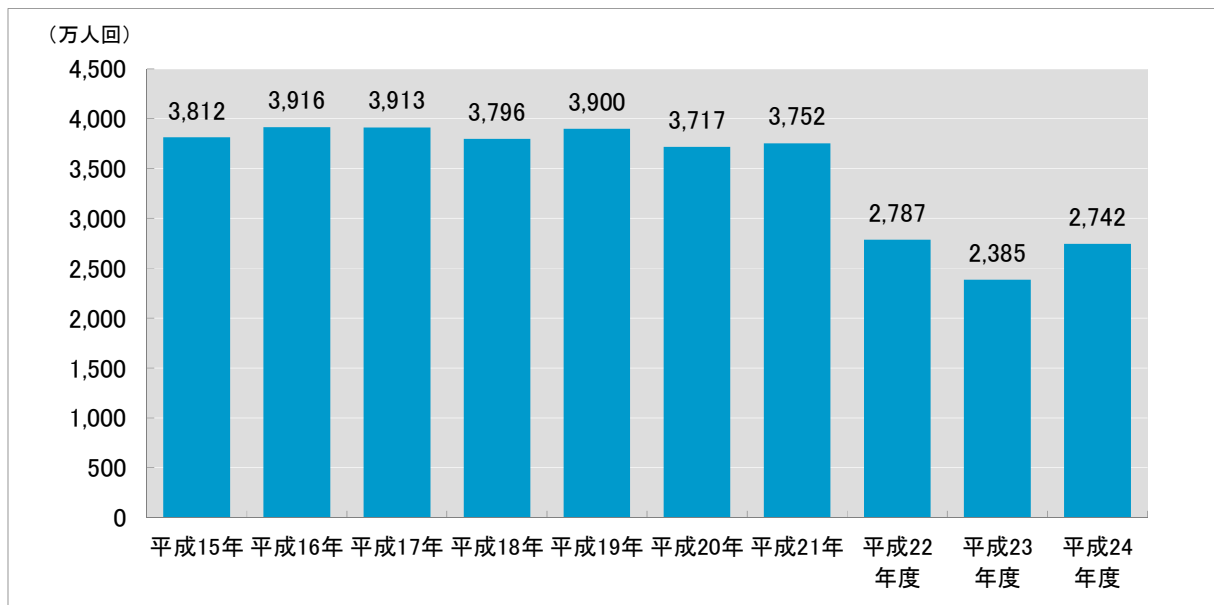
① 岩手県における観光入込客数の推移

岩手県の観光入込客数は、平成15年から平成21年までは4,000万人回弱で、ほぼ横ばいで推移していたが、平成22年度は、2,787万人回で、前年度より244万人回、8.0%減少している。(平成22年度以降、調査・集計方法が変更され、平成21年以前との単純比較はできないが、平成22年度と同様の条件で集計した平成21年度の入込客数は3,031万人回となる。また、平成22年度は、沿岸エリアにおいて東日本大震災の津波被害により入込データが喪失している市町がある。)

減少した主な要因としては、記録的猛暑等に加え、東日本大震災の影響が考えられる。

平成23年度の観光入込客数は、2,385万人回で、東日本大震災の影響が残り、前年度より402万人回、14.4%の大幅な減少となった。

図2 岩手県観光入込客数の推移



※平成22年度は、東日本大震災の津波被害により入込データが喪失している市町あり。

資料：岩手県観光統計概要／財団法人岩手県観光協会

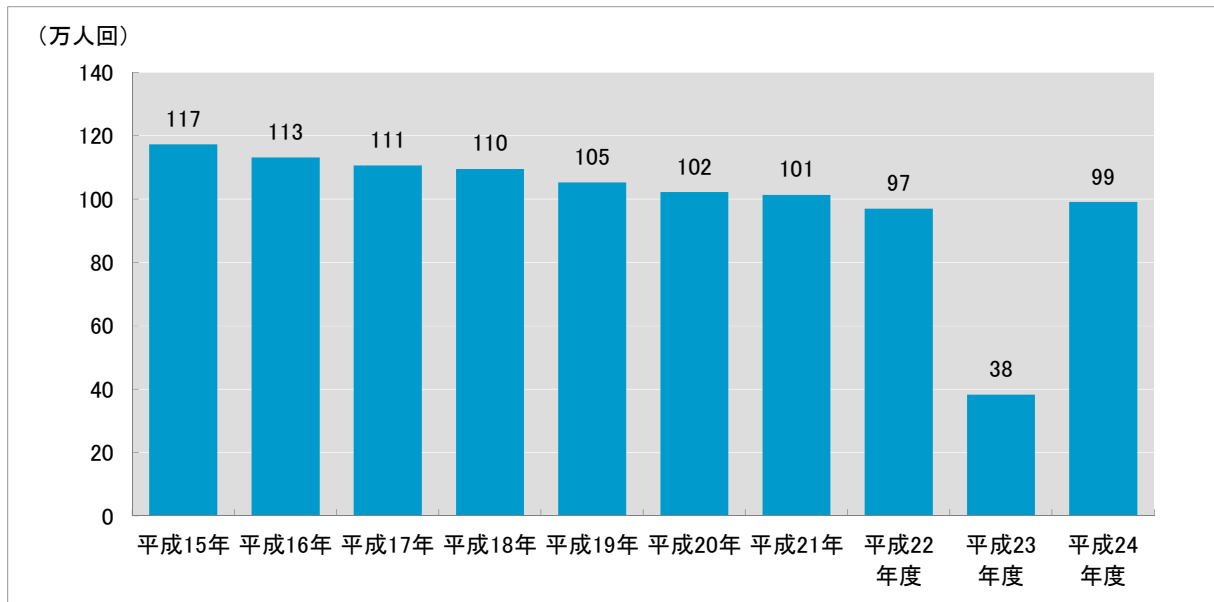
(2) 大船渡観光の現況

① 大船渡における観光入込客数の推移

大船渡の観光入込客数は、平成15年以降減少傾向にある。平成23年度の観光入込客数は、38万人回で、前年度の約4割と大幅に減少しており、東日本大震災の影響がうかがわれる。

平成24年度の観光入込客数は、99万人回となっている。これは、復興従事者の宿泊が増えているためであり、実際の観光客数としては、震災前の水準まで回復していないと考えられる。

図3 大船渡市観光入込客数の推移



資料：岩手県観光統計概要／財団法人岩手県観光協会

② 大船渡における宿泊観光入込客数の推移

大船渡の宿泊観光入込客数は、27～30 万人回で推移していたが、震災後の平成 24 年は 60 万人回を超えている。

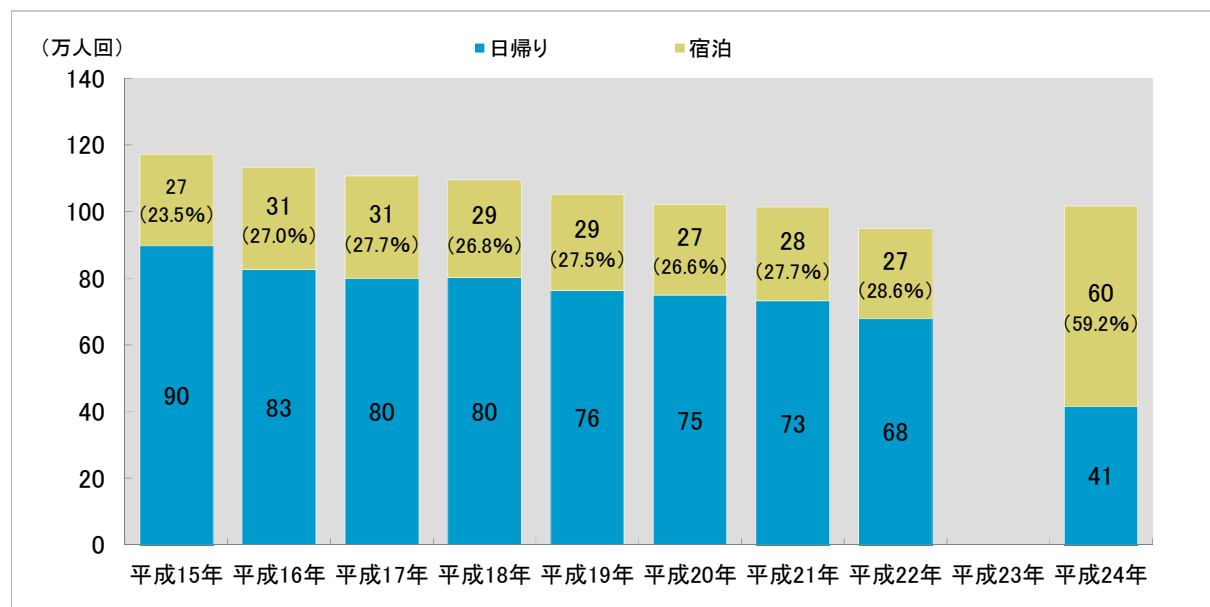
また、日帰り・宿泊の構成比で見ると、宿泊は全体の 3 割弱で推移していたが、震災後は 6 割を占めている。これは復興従事者の宿泊増に起因すると考えられる。

表 1 大船渡市形態別観光入込客数の推移

形態		平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年
日帰り	(人回)	896,702	826,238	799,383	802,360	763,100	749,640	733,015	678,153	－	414,978
	(%)	76.5	73.0	72.3	73.2	72.5	73.4	72.3	71.4	－	40.8
宿泊	(人回)	275,182	304,997	306,808	293,076	288,772	271,989	280,385	271,041	－	600,958
	(%)	23.5	27.0	27.7	26.8	27.5	26.6	27.7	28.6	－	59.2
合計	(人回)	1,171,884	1,131,235	1,106,191	1,095,436	1,051,872	1,021,629	1,013,400	949,194	－	1,015,936
	(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	－	100

資料：大船渡市統計書

図 4 大船渡市形態別観光入込客数の推移



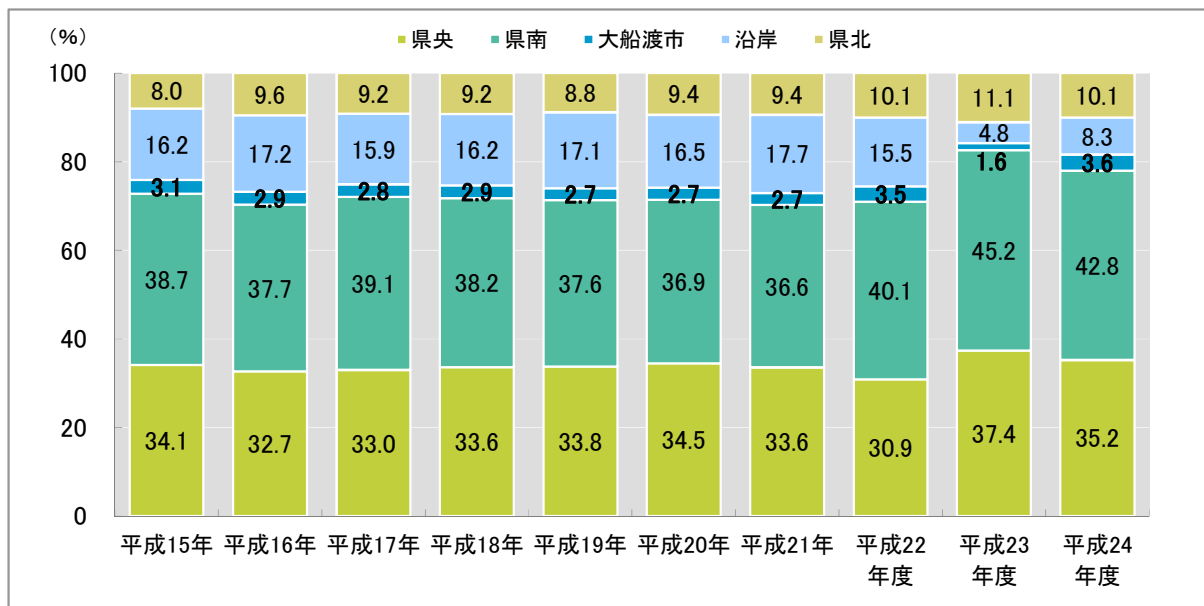
※図3と数値が一致しないのは、年度、年などのデータの集計方法が異なるため

③ 大船渡の岩手県における観光入込客数の占有率

岩手県における大船渡の観光入込客数の占有率は、平成22年度までは、約3%で推移していたが、東日本大震災後の平成23年度は1.6%に減少した。

一方で、平泉町を含む県南エリアは、世界文化遺産に登録された平成23年度には45.2%を占め、大きく増加した。

図5 大船渡市の岩手県における占有率の推移



資料：岩手県観光統計概要／財団法人岩手県観光協会

エリア名	市町村名
県央エリア	盛岡市、滝沢市、矢巾町、紫波町、雫石町、八幡平市、岩手町、葛巻町
県南エリア	西和賀町、花巻市、遠野市、北上市、金ヶ崎町、奥州市、平泉町、一関市、藤沢町
沿岸エリア	岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、田野畑村、釜石市、大船渡市、住田町、陸前高田市
県北エリア	洋野町、軽米町、九戸村、二戸市、一戸町、久慈市、野田村、普代村

※上図 における「沿岸エリア」は大船渡市を除いた値

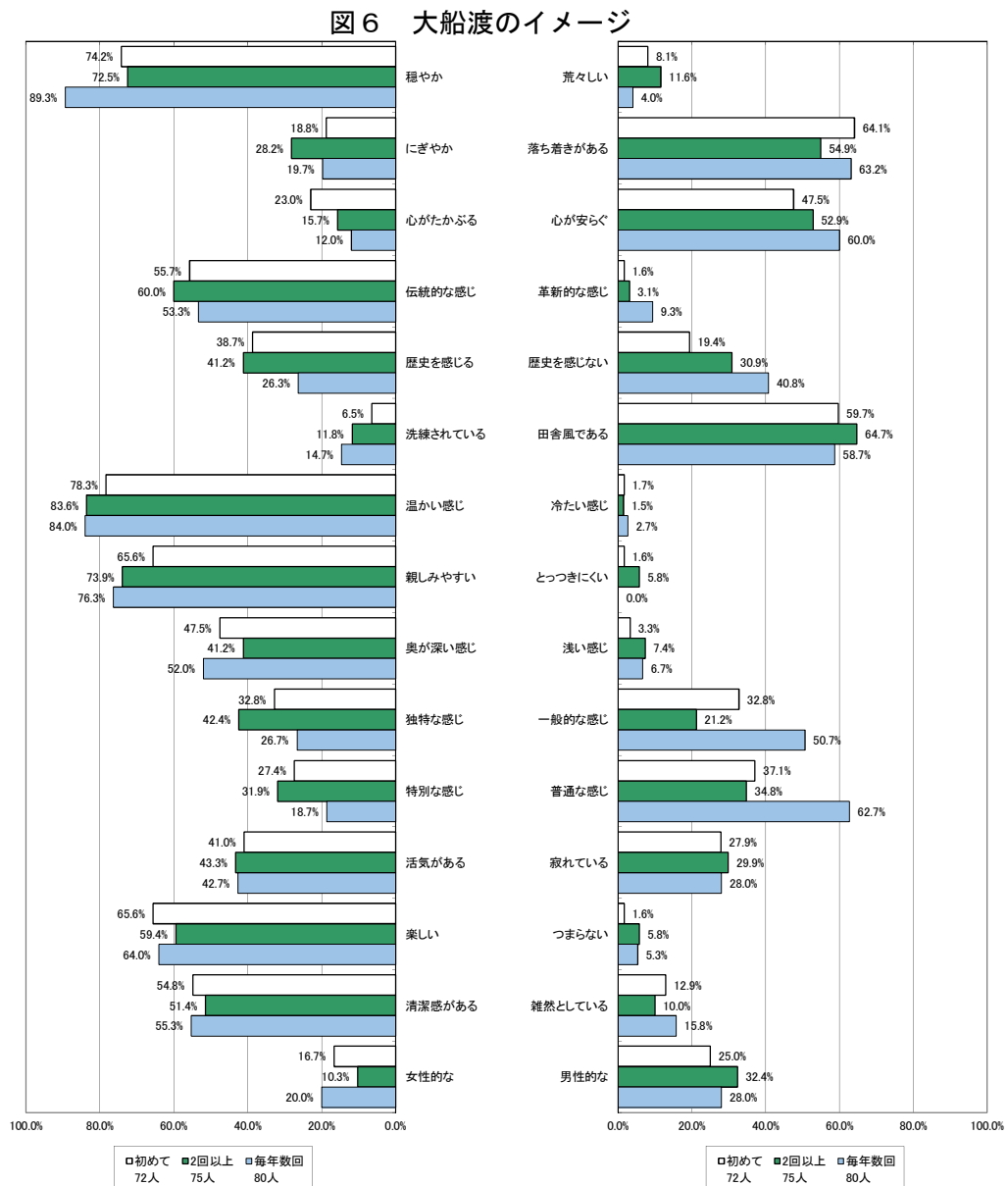
④ 大船渡のイメージ

観光客アンケートや地域ブランド調査の結果からは、大船渡は、三陸で海の幸がおいしい場所というイメージが定着していることがうかがわれる。

実際に訪れている人のイメージは、「穏やか」、「落ち着きがある」、「心が安らぐ」などのゆったりとした雰囲気に関わる印象、「温かい感じ」、「親しみやすい」などの接しやすさに関わる印象が高くなっている。

風景に関する印象としては、「田舎風である」、「伝統的な感じ」が高くなっている。その一方で、「一般的な感じ」も高くなっている。

また、2回以上大船渡を訪れている人の印象は、初めて来た人よりも「親しみやすい」が高いものの、一方で「楽しい」、「清潔感がある」が低くなっている。



資料：観光客アンケート調査
(平成25年10・11月及び平成26年5月に
市内観光施設にて観光客を対象に実施)

(3) 大船渡観光の魅力

大船渡の観光の魅力は、以下のとおりと考えられる。

① 豊かな食文化

ア) 豊かな海の幸

- ・変化に富んだリアス式海岸で、世界有数の三陸漁場があることから、サンマ、カツオ、サケ・マスなどの豊かな海の幸を味わうことができる。また、養殖漁業や栽培漁業が盛んでワカメ、カキ、ホタテ、アワビ、ホヤ、ウニなど、一年を通して様々な海の幸を味わうことができる。
- ・特に、吉浜産の乾燥アワビ「キッピンアワビ」は、古来より高級食材として珍重されている。

イ) 海の幸、山の幸を活かした郷土食

- ・海の幸、山の幸といった多様な食材を活かした、サンマのすり身汁、ドンコ汁等、その土地ならではの多様な郷土食がある。
- ・アイナメ、カレイ、イカ、ホタテ、ホヤなどの地魚等を食する浜の食文化が根付いている。
- ・大船渡に水揚げされた新鮮なサンマを使い、各店で工夫を凝らした「大船渡さんまら〜めん」がある。

② 変化に富む自然・景観

ア) 三陸海岸特有のダイナミックな自然

- ・三陸海岸特有の海岸地形、景観を楽しむことができる。「三陸復興国立公園」は、陸地の沈水によってできた日本最大規模のリアス式海岸で、外洋に長く突き出た半島や岬、これらに抱かれた穏やかな湾や入江で形成されている。
- ・その中でも基石海岸は、奇岩や島、洞穴などが点在し、約6kmの海岸線は「国の名勝・天然記念物」に指定されているほか、「日本の渚百選」、「日本の音風景100選」などにも選定されている。
- ・五葉山や今出山、夏虫山は、ニホンジカをはじめ、カモシカ、ツキノワグマ、ニホンザル、イヌワシ、フクロウなどの動物が生息しているほか、ツツジやシャクナゲをはじめとした貴重な植物を見ることができる。
- ・綾里崎、首崎、大窪溪谷、立石山など、雄大な眺望や景観を楽しめる場所がある。



穴通磯



碁石浜

イ) 特有の港湾の景観

- ・大船渡湾は、湾口が太平洋に向かって南東に開き、それから北折して、陸地に深入した湾である。全長は6 km あり、湾内の幅が最も広いところで2 km、周囲は丘陵等で囲まれ、常に波風を防いでいる天然の良港である。慶長16年(1611年)スペインの探検家、セバスチャン・ビスカイノが当地を探検したおり、湾を讃え「サン・アンドレス湾」と名づけたと言われている。
- ・大船渡湾は、昭和34年国の「重要港湾」に指定されて以降、岩手県の物流拠点の一翼を担っている。東日本大震災により港湾施設が大きな被害を受け国際貿易コンテナ定期航路が休止となったが、平成25年9月には、国際フィーダーコンテナ定期航路が開設された。このため、大型客船や大型貨物船、漁船等の多様な船舶が航行する様子を見ることができる。
- ・一方、湾上からみた大船渡は、海沿いの市街地とその背後の丘陵地の緑の斜面からなる魅力的な景観を呈している。

③ 隠れたる気仙の歴史・文化

ア) 知る人ぞ知る気仙の歴史を伝える歴史・文化

- ・大船渡湾岸には、国指定史跡となっている蛸ノ浦貝塚、下船渡貝塚、大洞貝塚など多くの貝塚がある。これらの貝塚からは、鹿角製の釣針やモリなどの漁具、アサリやカキ、ホタテなどの貝殻のほか、マグロ、ブリ、カツオなどの魚の骨も発見され、当時の海の豊かさを今に伝えている。
- ・気仙地域には平泉の黄金文化を支えた金山が点在しており、大船渡にも今出山金山等があったと伝えられている。
- ・国指定重要無形民俗文化財の「吉浜のスネカ」、県指定無形民俗文化財の「浦浜念仏剣舞」や「門中組虎舞」など、各地域に多様な郷土芸能が継承されている。

- ・江戸時代より「気仙大工」として名を馳せた大工集団がおり、全国各地に気仙大工の手による建築物がある。大船渡には長安寺、洞雲寺、浄願寺などをはじめとした気仙大工の技術の粋を尽くした建築物がある。
- ・綾里地区は、気仙大工の巨匠花輪喜久蔵を輩出した地であり、現在でも気仙大工の手による建物がある。
- ・三陸特有の入母屋で黒瓦屋根の豪壮な住宅が集積した集落が点在している。



長安寺

イ) 心温まる人柄

- ・陸の孤島といわれる気仙地域には、峠を越えて訪れた来訪者に対して、「まずは落ち着いて」という気持ちであんこもち、うどん等を振る舞う「おちつき」という風習がある。
- ・観光客アンケート調査で「大船渡を訪れた方の大船渡に対するイメージ」は、「温かい感じ」「親しみやすい」などの接しやすさに関わる印象が高くなっている。みなとまちや浜で暮らす人々の人柄は、交流を行う上で来訪者からみたときの重要な魅力といえる。

④ 津波の教訓を伝える人と暮らし

ア) 復興のシンボル 三陸鉄道南リアス線

- ・三陸鉄道南リアス線は、東日本大震災では甚大な被害を受けたが、全国各地からの励ましや支援を得て復旧し、震災復興のシンボルとなっている。
- ・三陸鉄道南リアス線は、地域の足として市民の生活を支えているほか、恋し浜駅では「恋し浜ホタテ」の貝殻が絵馬として使われ、多くの方々が祈願している。
- ・列車で移動しながら震災時の状況や復旧・復興の状況を説明する「震災学習列車」を運行し、防災意識の向上を図っている。

イ) 津波から身を守る知恵

- ・吉浜地区は明治三陸沖大津波（1896年）や昭和三陸沖大津波（1933年）の教訓から、高台に家を再建するよう促した。これにより、東日本大震災では被害を最小限にとどめることができ「奇跡の集落」と呼ばれている。
- ・古くから津波に苦しめられてきた三陸地方の教訓である「津波てんでんこ」（自分の責任で早く高台に逃げろの意味）に基づいた防災教育がある。

2. 課題

大船渡の観光の課題は、以下のとおりと考えられる。

(1) 食の魅力の向上

① 「食の大船渡」のブランド力を高める取組の推進

- ・食材を活用した観光振興は全国的に行われており、大船渡の特色を演出するためには、既存食材に加えて、新しい大船渡ブランドの研究・開発が重要な課題である。
- ・特に、地元の事業者の連携・協力のもと、新しい大船渡ブランドの創出や6次産業化に対応していく気運の醸成が必要である。

② 魅力ある大船渡の観光物産の開発及び販売促進

- ・三陸ワカメ等の売れ筋商品はあるものの、観光客のニーズに応じた多様なおみやげ品の開発が必要である。また、観光客が立ち寄りたくなるような買物場所の整備が必要である。

(2) 観光資源の魅力の向上

① 砂浜の回復と海水浴場の早期復旧

- ・夏場のレクリエーションの場として、綾里海水浴場、越喜来浪板海水浴場、吉浜海水浴場があるが、東日本大震災で被災した砂浜の回復状況を勘案しながら早期復旧に向けた検討が必要である。

② 新たな観光資源の魅力の向上

- ・世界の椿館・碁石や市立博物館といった展示施設は、観光資源として重要な施設であることから、さらなる魅力の向上を検討する必要がある。
- ・スポーツ・レクリエーション施設は、地域住民が手軽に楽しめる施設であるとともに、観光客を呼び込める重要な機能を有していることから、観光施設としての利活用方を検討する必要がある。
- ・長安寺や洞雲寺等は、本市を代表する文化的な資源であることから、観光客の誘致・誘導策を検討する必要がある。

- ・観光客アンケート調査によると、大船渡の風景の印象は強いものの、観光施設の印象は弱く、魅力的な観光資源となっていないことがうかがわれる。また、小規模な観光資源が市内に点在しているため、まとまりや統一感が形成されていない。このため、魅力ある観光資源として活用していくためには、大船渡全体としての観光コンセプトやテーマを設定することが必要である。
- ・また、大船渡を訪れている来訪者は、主な目的がドライブと食事、日帰りが中心となっていることから、滞在型の観光メニューの開発が必要である。

③ 宿泊施設の充実

- ・震災復興従事者の宿泊により宿泊施設が満室状態となっており、観光旅行者の宿泊が難しい状況となっている。大船渡市内での滞留時間を多く確保するためには、宿泊施設は重要な役割を果たす施設であり、「海岸部」「まちなか」「内陸部（山地）」の立地特性を活用した宿泊施設の確保を検討することが必要である。

（３） 交通アクセスの改善

① 「遠いところ」というイメージの改善

- ・大船渡は、東北自動車道などの幹線道路網からのアクセスが悪く、また起伏や曲折が多い道路形状等により、「遠いところ」というイメージをもたれている。三陸沿岸道路や東北横断自動車道釜石秋田線の整備を契機として、交通アクセスの改善を図ることが必要である。

② ドライブしやすい案内誘導方策の検討

- ・観光アンケート調査によると、「道路の案内誘導がわかりにくい」という意見が寄せられている。このため、市内の主要な観光スポットや施設等への案内誘導方策の改善が必要である。

（４） 近隣自治体との差別化と連携の構築

- ・三陸復興国立公園は、青森県から宮城県に至る広域的な国立公園であるため、近隣市町村との連携を図り、本市への周遊を促進していく必要がある。その中で、食材の食べ方・売り方等、大船渡としての差別化を図ることが必要である。

(5) 知名度の向上・情報発信力の強化

① 観光情報発信力の強化

- ・パンフレットやホームページ等により大船渡観光のPRを実施しているものの、観光地としての知名度が低い状況にある。観光客への情報発信の方法は、インターネットやスマートフォン・タブレット等の普及で、大きく変化していることから、新しい情報発信手段への対応など、観光情報発信力を強化することが必要である。
- ・同時に、大船渡観光としての統一的なテーマ・コンセプトを設定し、魅力を発信していくことが必要である。
- ・観光パンフレットの配布場所の周知やパンフレットに掲載する情報の充実など、来訪者に対するきめ細かい情報発信のあり方を検討する必要がある。

② 大船渡のイベント情報の積極的な発信

- ・復興支援関連イベントとして、さまざまなイベントが開催されているものの、それらのイベント情報が市民や観光客へ十分に届いていない状況にある。イベントは、地域住民や観光客の参加により、賑わいを創出する機会であることから、観光振興策の柱として積極的に情報発信を行っていくことが必要である。

(6) 市民・観光事業者の意識改革

- ・観光客の大船渡に対するイメージは、「温かい感じ」「親しみやすい」などの接しやすさに関わる印象が高くなっていることから、これらの印象を大切にし、大船渡の観光事業者の施設の衛生管理、電話対応、接客などの基本的なサービス水準の向上を通じて、「おもてなし」の意識をより一層高めることが必要である。